

もちろん、クルアーンのテキストは重要な要素のひとつではある。たとえば、紙やダンボールなどに章句を自ら書いて貼っている自家製クルアーン装飾品も、3例ではあるが確認できた。このことは、テキストの重要性をよく示している。

しかしながら、実際にはほとんど全てのクルアーン装飾品が、テキストのみではなく何らかのデザインと一緒に描かれており、さまざまな形状の装飾品が存在することが判明した。テキストとともに、テキストにまわりつく形状が、ムスリムに装飾品を購入させ、それを室内に飾らせていることが理解できる。

以上、チュニジアの室内におけるクルアーン装飾品を、宗教グッズの一事例として紹介した。先述したように、先行研究では宗教グッズの複製可能な大量生産品としての性質が、ひとつの論点として議論されてきた。しかしながら、複製可能な大量生産品として想起されるような、同じものが多く存在するイメージとは裏腹に、それが使用されている現

場では、実にさまざまな種類のものが使用されており、同一のものを探すほうが難しい。たとえ大量生産されたものでも、ムスリムたちは自らの嗜好にあったオリジナルなクルアーン装飾品を選んで飾り、自らの宗教実践の中に取り込んでいるのである。

引用文献

- Starret, G. 1995. The Political Economy of Religious Commodities in Cairo, *American Anthropologist* 97: 51-68.
- 大塚和夫. 2010. 「宗教施設の商品化とその限界」私市正年・赤堀雅幸・寺田勇文編『グローバル化のなかの宗教—衰退・再生・変貌（地域立脚型グローバル・スタディーズ叢書）』ぎょうせい, 113-132.
- 桑原知子. 2005. 「〈彼岸工学〉ことはじめ—『この世ならぬもの』を演じる・からくる・生きる」『九州人類学会報』32: 11-21.
- 小杉麻李亜. 2008. 『イスラームの聖典クルアーンの人類学的研究—テキスト性と口誦性を統合する文化装置論的アプローチから』（立命館大学大学院 先端総合学術研究科博士論文）
- 榎屋友子. 2009. 『すぐわかるイスラームの美術—建築・写本芸術・工芸』東京美術.

ボンボ（悪霊）がやってきた日

大 出 亜矢子 *

私はインドネシア、南スラウェシ州の山岳地、北トラジャ県を対象に、土地利用の動態

を調査している。調査県は急峻な山岳地に位置し、高地の村落を調査するためには、アク

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

セスにバイクと徒歩で1日を要する。そのため私は、下流域にある県都ランテパオのバス会社の社員宿舎に部屋を借りて荷物や機材を置かせてもらい、数日間かけて山の上の村落に調査に向かうことにしている。

ランテパオは、北トラジャ県の政治・経済の中心地であり、大通りは夜でもとても賑やかだ。毎晩、人々の関心を集める何らかの事件に出くわすことができる街だ。ベランダから外を覗いていれば退屈することはない。

写真1の犯人は、警察と野次馬を併せて総勢200人を超える人に見守られ、2時間後にトイレから出てきた。遭遇した印象深い事件は枚挙にいとまがないが、ここでは背筋が凍る、ある夜の事件をひとつ紹介したい。

さては、アヤコか、悪霊か…

コツ・コツ、コツ・コツ。午前4時半、社員宿舎の全部屋のドアが一斉に何者かによって叩かれた。

ドン・ドン・ドン・ドン・ドン・ドン。そのドアを叩く物音は一層激しさを増し、数分

間にわたって続いた。そして、その物音によって眠りから起こされた宿泊者たちはドアを開けたが、そこには誰の姿もない。呆気にとられた宿泊者たちは、顔を見合わせるとみな1階のインターネットカフェに集まった。

ひとり、またひとりと部屋のドアを開き、ついには1階に全員が集合した。しかし人数がひとり足りないことに、宿舎の女主人は気が付いた。心配になった彼女は部屋から出てこない宿泊者を呼びに2階へ上って行った。

「アヤコ、アヤコ！」と私の名前を大声で呼んだ。しかし、ドアには鍵がかかっており、部屋の中からは一向に返事がない。

女主人はひとまず1階に降り、状況を報告した。すると、全員がざわつき、さっきの物音の犯人は誰だったのかという話になった。ひとしきり盛り上がったところで、集まったメンバーの中で最年長者である、女主人の母親のイブが神妙な面持ちで口を開いたという。

「マカニャ…アヤコ、アタウ、ボンボ（さては、アヤコか、悪霊か…）」

もちろん、犯人は私ではない。私が悪霊なわけでもない。

ちょうどその日、私は隣県との境界にある村落で3日間かけて土壌の採取とインタビュー調査を終え、久々に宿舎に帰ってきたところだった。いつもなら、宿に帰った日の夜は、私は1階のオープンスペースで雑談をしたり、コンピューターのデータ入力の作



写真1 バイク泥棒トイレ立てこもり事件
(2012年10月13日、宿舎向かいにて)

業をしたりと、宿舎のメンバーや家族と顔を合わせている。その日は移動が長かったせいか、いつになく疲れていたため直接自室に戻った。その後すぐに床につき、翌朝窓から朝日が差し込むまで、深い眠りについてしまった。そのため明け方にあったというドアを叩く音にも、名前を呼ばれる声にも全く反応しなかったのだ。

イブが私をノックした犯人として疑うのはわけがあった。私はたびたび、データ整理の終わらない夜など、皆が寝静まってからも深夜まで1階のインターネットカフェを使わせてもらっていた。しかし、市街地の中心で深夜まで煌々とガラス張りのインターネットカフェから明かりがもれていれば、さまざまな来訪者がやってくる。その度にガラス越しの筆談で丁寧に事情を説明して帰ってもらっていたのだが、明け方のノック事件が起きるちょうど1週間前の深夜に、少々厄介な来訪者があったためイブに確認をとるため、部屋のドアをこつ、こつとノックしたことがあった。その時、結局イブは起きず、私は交渉を断念したのだった。翌朝になってイブに事情を説明すると、「起こしたいのなら、ドアを思いっきり叩かないと私は起きないわ」と笑い飛ばされた。その記憶の新しいうちに、“事件”が起きた。その際イブは真っ先に、ドアを必死に叩くアヤコの姿を思い浮かべたのだそうだ。

“事件”当日、朝6時を過ぎて、ようやく目を覚ました私は1階へ下りてみると、早朝にもかかわらず、そこにはいつもより多くのメンバーがそろっていた。ノック事件の話

に花が咲き、ほとんど全員が朝までそのまま話し込んでいたそうだ。

皆からの熱狂的な説明を受けて事情を把握した私は、その「容疑」に対して、自分は犯人ではないと早々に告げた。すると何人かが歓声としか考えられない奇声をあげた。その表情はイキイキと明るく、そこにいた皆がボンボの来訪を確信して喜んでいて、なぜ皆はボンボの来訪を喜んでいたのであるのか？

ボンボとは、トラジャ語で最近死んだ、もしくは今死にかけている魂を指し、悪霊や死霊を意味する言葉でもある。

私は、皆がノックをした犯人が、ボンボではなく、生身の私であることを期待しているのだらうと、実際とは真逆の反応を想定していた。そのため、展開が読めず、少し呆氣にとられてしまった。

では、私が羨ましさを覚えるほど、彼らを夢中にした「ボンボ」とは、一体トラジャの人々の中でどのような存在なのだろうか？

ここでは、トラジャの歴史と習俗文化をたどりながら、トラジャにおける精霊信仰、死生観について、調査者のフィールドの経験をもとに考えていきたい。

トラジャの伝統宗教「アルク・トドロ」

トラジャとは、ブギス語で“人々”を意味する *to* と“高地”を意味する *ri-ja* を組み合わせて作られた、土地の呼称である。

1892年から始まるオランダ人宣教師の布教活動を通じて、“Toraja”は中・南スラウェシに住むすべての高地民を示すとされた。のちに文化人類学者によって文化と言語の観点

から基礎的な民族の再分類が行なわれ、中スラウエシの高地民が“Toraja”，南スラウエシのサダン地域に住む高地民が，“Sa’dan”と定義された。

しかしながら、現地の人々の間で浸透しなかったために実際にこの呼称が世間に定着するには至らなかった。

1930 年にサダン地域が独立する際に、地域政府は“Toraja”という名前を受容した。そのため、現在ではトラジャという言葉は、南スラウエシ州のサダン川上流に位置する地域を指して用いられる。

現在住民の多くはキリスト教を信仰している。これは 1950 年代以降にスラウエシ島南部で生じたイスラム教過激派の独立運動に対抗するためにトラジャ地域の人々が団結し、積極的にキリスト教に改宗したからだ。

しかし、それ以前には精霊崇拜と関係の深いアルク・トドロと呼ばれる伝統宗教が信仰されていた。これらは現在でもトラジャの伝統的な習俗儀礼の中にみることができる。

習俗儀礼にみえる死の文化

大小さまざまな丘陵地帯からなる山岳高地に位置するトラジャでは、集水性の高い谷地形が発達し、水稻栽培が伝統的に行なわれてきた。このため、稲作儀礼には顕著に、旧宗教アルク・トドロの精霊信仰が表れている。たとえば、田植え前には、ボンボが害を与えぬよう、供物として呪術者が米、酒、水、たばこなどを芭蕉葉にのせて供え、雌鶏の血を田に注ぎ、その肉の一部もまた芭蕉葉の上に一緒に供える。

血肉の生贄の風習はトラジャのさまざまな伝統儀礼においてみることができる。

葬送儀礼においては、水牛は死者を冥界に導く使者、そして冥界での財産とされ、社会階級に応じた数の水牛が屠殺される。また豚も同時に数頭～十数頭殺される。それらの肉は、黒衣をまとった参列者らに対して配分される。婚姻儀礼の際には、水牛を殺すことは許されず、豚肉のみが振舞われる。

慣習上、こうした儀礼は農閑期に行なわれていたが、近年では年間を通じて開催されている。それは、トラジャにおいて、伝統儀礼（特に葬送儀礼）は観光資源化されており、地域政府から、開催時期をかつての農業暦に従わないようにと勧告が出されているためである。そのため、どこかの集落で催されるこうした儀礼に、私も 1 週間に 1、2 度はタバコと引き換えに参列し、大量の豚肉（葬送儀礼ならば水牛肉も）とヤシ酒でお腹を満たしていた。葬儀との遭遇は、スコップを背負って山岳地を往来する調査者にとって、とてもありがたい機会である。山岳高地の源流部では、河川に魚を見つけることは難しい。その



写真 2 婚姻儀礼用に殺されたオス豚

ため、それぞれの家族は、庭に養殖池を掘り、そこに数匹のナマズを飼育していることも多い。子どもたちにとって、ナマズは貴重なタンパク質源であり、ご馳走である。日常の食事にてタンパク質を摂取する機会の少ない彼らにとって、葬送儀礼は、またとない肉の補給チャンスである。葬儀があるという噂を聞きつけると、子どもたちは目をキラキラと輝かせる。私も調査用ザックの底には黒衣を忍ばせており、いつでもどこでも死者の弔いに参加する支度をしている。

私は当初、葬送儀礼への過程やその最中においても、「死」が日常と結びついている様子に、ずいぶん驚かされた。まず人が亡くなると、遺体の腐敗を防ぐ特別な注射や薬草を塗る処理が施された後、親族がお別れを告げに戻ってくるまで、もしくは葬儀をする資金の準備が整うまでの数日間から数年間、人々が日常生活をおくる、舟形の屋根をもつ伝統家屋の中に安置される。ここではまだ冥界に渡る前なので、生前と変わらず、まるでそこで寝ているかのように扱われていた。そして葬送儀礼の際に、冥界への引渡しが行なわれる。儀礼を終えて、棺が墓地へと参列者の男たちによって担ぎ運ばれる際には、あの世へと向かう死者を決起するためと、大きな歓声とともに、御輿が激しく揺すられていた。

参列者が全員で御輿のお供をする、1時間弱の間に、私が気付いた限りで4度も棺が激しくバウンドし、御輿から飛び出して地面に放り出されていた。その度に笑い声起き、御輿を修復し、また上下に揺する、ということの繰り返しだった。それは、同じよう



写真3 振り落とされた棺を御輿に収納し、つぶれた箇所を修復する男たち

に黒服を纏いつつも「しめやかに」執り行なわれる日本の葬儀の雰囲気とはまるで異なり、真っ赤な血と肉が溢れるお祭りのようである。

また調査の仕事を終えて、夕方に友人らと談笑していた際、私は彼らにお気に入りの場所につれて行ってほしいと懇願した。すると、谷の縁の丘に連れて行かれた。

夕日が低い角度から斜めに射した棚田の谷は、畔の段差に立体的な影が入りとても美しかった。それに感動していると、友人は、自分がその地点を気に入っている理由は景色の美しさではないという。谷頭部の岩壁には先祖の墓があり、死んだ先祖の霊に見守られている感じがして落ち着くのだそうだ。

このように、トラジャの「死」が日常生活にとっても近いものであり、いくつかの観光名所化された墓地の雰囲気のような冷たく暗いイメージとは対照的であることに、私は滞在中に何度も気付かされた。

アヤコ、アタウ、ボンボ？

トラジャの西にはアワン（雲）という名前のつく地域がある。2 週間ほど、調査のためにそこに通っていた。毎日調査を終え宿舎に帰る度に、インターネットカフェで働く若いお兄さんから、「アヤコ、天国から何回目の甦りかい？」と、なかなかのブラックジョークを笑顔で飛ばされる。トラジャではブラックジョークにはブラックな返答が必要だ。きっと次回調査もまた同じ冗談を言われるだろう。そのときは、元気にこう答えようと思

う。「プランニャ、ボンボ！（ボンボのおかえりだよ！）」

ところで、宿舎に来訪した「ボンボ」は一体何者だったのか？ 実は、事件には後日談があり、翌日バス会社の運転手が衝突事故で亡くなったという知らせが入った。恐らく、明け方にその魂が宿舎に戻ってきたのだろう。ではなぜ私にだけ何も聞こえなかったのか？

私はトラジャの魂や精霊の気配を受け取るには、まだまだ未熟なのかもしれないと思った。

陽を待つひと

近 藤 有希子 *

「お天道さまが照らしてくれれば、壺がつかれる。そしてわたしたちは食事にあつける。雨が降ると、わたしたちは死んでしまう。もちろん、雨が降らないとマメが育たないことも知っているけれど。」

トゥワの女性、シャンターリと初めて出会ったとき、手のなかでくるくると壺ができあがっていくようすに見入っていたわたしに、彼女はつぶやいた。昼ちかく、ひらけた空に太陽が眩しかった。

ルワンダ共和国の南西部に位置するわたしの調査地 K 村は、標高 1,900 メートル前後

の丘陵がひろがる冷涼多雨な地域である（写真 1）。「2 日雨が降れば 1 日晴れて、そしてまた 2 日雨が降る」とは村の古老が教えてくれた天気の法則であるが、この地域では乾季とされるときであっても、雨が降ることもしばしばだ。何気なく発せられたシャンターリの言葉が胸にとまったのは、わたしが普段つきあうフトウの人びとには、雨を好む人が多いからである。彼らは農耕に従事しており、主としてインゲンマメを栽培する（写真 2）。

雨が降る前には丘を駆けめぐるようにして冷たい風が吹きはじめ、重たい雲が垂れこめ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科